

国立国会図書館国際子ども図書館シンポジウム
絵本の黄金時代 1920～1930年代：アメリカとソビエトを中心に

絵本の黄金時代は、日本に何をもたらしたのか？

平成 22 年 11 月 27 日

講師：島 多代

はじめに

「絵本の黄金時代 1920～1930 年代—子どもたちに託された伝言」展は、米国とソ連、それぞれの歴史的社会的状況の中で、当時の子どもの本の創り手と渡し手は誰であったのかについて多くのことを語っています。そして、私たちにとって恐らく最も大切なことは、日本で第二次世界大戦敗戦後に、子どもたちにどんな本を与えたらよいかと誰が考えていたか、ということです。

アイリーン・コルウェルさんと石井桃子さん

2003 年、英国の児童図書館界の指導者故アイリーン・コルウェル (Eileen Colwell) さんの追悼会が東京子ども図書館で開催されました。皇后様も石井桃子さんも出席なさったその会で、東京子ども図書館の松岡享子さんがローレンス・ハウスマン (Laurence Housman) の「中国のフェアリーテール」というお話を語りました。この物語は、石井桃子さんが戦後 2 度目の訪米の際に、カナダのトロントで行われたお話大会でコルウェルさん自身が語ったお話でした。それは貧しい中国の少年見習いが、真夜中になると、額に収められた名画の中の画室から現われる絵の大家に教えられ、ついには、絵の中に入って数

年後、大家となって帰ってくるという、感動的な物語です。石井桃子さんはその著書『子どもの図書館』で、当時のコルウェルさんのストーリーテリングの圧倒的な感動力について語っています。やがて石井桃子さんがコルウェルさんと東京子ども図書館を結び付け、「お話」が東京子ども図書館の仕事の中心的な位置付けとなります。

岩波の子どもの本と家庭文庫研究会の本

さて、日本の戦後の絵本史で、忘れてはならないことがあります。1950 年代に『ちいさいおうち』、『はなのすきなうし』、『ひとまねこざる』などが、「岩波の子どもの本」シリーズとして出版されました。版型はシリーズとして制約され原書の迫力には欠けるものがありましたが、日本では初めて、一つのストーリーで一冊の絵本が出版されるという画期的な仕事となりました。それに続き、1961 年 1 月 1 日付けで『シナの五にんきょうだい』、『100 まんびきのねこ』、『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』、『アンディとらいおん』が、家庭文庫研究会編として原書と同じ版型のハードカバーで出版されました。石井桃子さんと村岡花子さんが中心となっていた家庭文庫研究会が翻訳し、翻訳権を持ち、福音館書店

が協力するという一つの試みだったと考えられます。しかし、周りにいた文庫のお姉さんたちは当時、リュックサックに本を詰め、背負って売り込みに行くほどの覚悟を決めていたそうです。絵本一冊が、まだ非常に安くて50円とかそのぐらいのときに、350円とか250円という定価ではとても売れるとは思えない時代でした。大手の出版社でもあえて危険を避けねばならない時代だったのでしょう。しかし、原書と同じサイズ、一冊一話の絵本の素晴らしさに図書館や幼稚園の先生たちが目を開きました。2刷目からは出版社が本格的に出版に乗り出しました。

石井桃子さんの渡米

これらの本の出版への道のりは、恐らく、1950年代の石井桃子さんの渡米に端を発していると考えられます。坂西志保さんという人が戦後、GHQと共に来日し、石井桃子さんをロックフェラー資金で渡米させたのです。坂西志保さんは、戦後の日本の社会科の教科書を執筆したり、新潮社から『住みよい社会をつくる人たち:7人のアメリカ人』（坂西志保著、新潮社、昭和27年）という本を出版したりしましたが、余り多くの人には知られていません。それはなぜでしょうか。いずれにせよ、米国を視察した石井桃子さんは、「絵本の黄金時代」を築いた米国の図書館員、編集者、出版人と実際に会う機会に恵まれたのです。

「ポストの数ほどもある」アメリカの図書館と児童書の創り手たちに感動した石井桃子さんは帰国後、自宅を開放して文庫を開き、子どもたちの読書を観察して『子どもの図書館』（石井桃子著、岩波書店、1965年）を1965

年に著し、これが全国に多くの文庫を誕生させるきっかけになったと言われています。1950年代後半と1961年の絵本の出版は、これに先駆ける活動の一部でした。子どもの本に独自の発展の歴史を持つ日本が、戦後、さまざまな変遷を経て現在に至っていますが、石井桃子さんが松岡享子さんに託した東京子ども図書館は創立36年で公益財団法人となりました。国立国会図書館国際子ども図書館は今年(2010年)で10周年を迎えています。今、私たちは、60年前の終戦直後、素手で、将来の子どもたちのために世界を引き寄せたこれらの先輩たちの業績に頭を下げずにはいられません。

おわりに

これから、戦後の日本が多くを学ぶことになるソビエトの絵本について、ヴェレナ・ラシュマンさんから、また、アメリカの1920年代～1930年代の絵本について、レナード・マーカスさんにお話を伺います。マーカスさんもラシュマンさんも素晴らしい絵本の内容を話してみせてくださると思いますが、その黄金時代の真価が示されて私たちが何を考えるか。

私は実際に60年代に小さな子どもと共にニューヨークに住んでおりました。その頃、マーカスさんは生まれていらっしやっただかなと思いましたが、もう高校生だったそうです。まだ高校生ですから研究は始まっていません。そして私は図書館の本を満喫し、当時のニューヨーク・タイムズ紙が芸術の一分野として絵本を論評しているのに驚いていました。そういうニューヨークの体験が私を絵本に近付けていたということも確かなのです。

ラシュマンさんは、チューリヒのヨハンナ・シュピーリ文書館で、1980年代の後半にソ連の絵本を恐らく西洋で最初に展示された方です。私はその展示を見て感動し、ラシュマンさんのソ連の絵本の解説「あったのか、なかったのか」を頂いて1992年に『ソビエトの絵本：1920-1930』（ジェームス・フレイザー、島多代共編、リプロポート、1991年）を米国の研究者ジェームス・フレイザー（James Fraser）と共著で、リプロポートから出しました。その後、実は「アメリカの絵本：1920-1930」が続くはずだったのですが、

不況時代が始まりそれは残念ながら実現しませんでした。しかし、当時、JBBYが全国4か所で開催した絵雑誌の輝かしい歴史を披露した「子どもの本・1920年代展」は、日本中で同年（1991年）、最多の観客を動員した展覧会となりました。残念ながらこのカタログを余りに多く刷りすぎたために、JBBYは実際の貢献と裏腹に赤字を背負うということになり、JBBYの中ではこの展覧会はなかなか評価がされていないのですが、歴史的には重大なことだったと思います。